

# と 経営 健康

第4回

## 生き残りへ 智略縦横 真田三代

講談師 一龍斎貞花

「真田丸面白いよね、話してるの」と、よくお声がかかります。高座は勿論ですが、企業講演で「生き残るためには知恵を、小も必ず生き残れる」と。

徳川をやっつけた真田を、秀吉は必ず喜んで迎えてくれるという昌幸の読み通り、秀吉は、真田を国衆から独立した大名にと取り立ててくれたばかりか、その後も真田討伐に軍を進める徳川に対し、秀吉が間に立って戦いが中止され、「ヤレヤレ、豊臣についての意味があった。だがここで徳川にも頭を下げておこう、信幸、徳川へ行け」

長男を徳川へ、次男を豊臣へ人質に、いかに生き残るためとはいえ出来ることではありません。

幸村は、秀吉に気に入られ、重臣と交流し、大谷刑部の娘お竹姫と結婚。

一方家康は、本多平八郎の娘小松姫を自分の養女にして信幸に嫁がせた。

武芸百般に通じ男まさり、それでいて大層な美人、大河ドラマでは吉田羊さん、信幸二十三歳、小松姫十六歳。

このように兄弟ともに、重臣の娘を妻に迎えたことは、いかに二人が、秀吉家康から目をかけられていたかがわかります。

同盟を結んでいる徳川と北条の間に「信濃は徳川、上野は北条」の協定があり、「されば上州を引き渡して頂きたい」と北条の申し入れ、間に入った秀吉が、「沼田城を含む利根郡を北条に、但しその内の名胡桃城周辺と吾妻郡は真田の持分とする」

またまた沼田を渡せという、痛いが見つけた領地分は、信濃の代替地を与えられるという。家康仕方なく箕輪

一万二千石を真田へ。名胡桃城へ家臣鈴木主水を城主にしたところ、北条の策略にかかってまんまと乗っ取られてしまった。

「これは豊臣に対する宣戦布告にほかならん。北条征伐じゃ」

大軍をもって小田原城を取り囲み、小田原落城。沼田城は家康の臣下となつた信幸が城主に。

「よいか信幸、死んでも沼田を手放すなよ。信濃の小県郡と沼田は我真田一族の血肉と同じ、所領を守るためには、わしは天魔に心を売っても構わぬ」

父昌幸の言葉は、信幸の心に深く刻まれます。

家存続に、親子兄弟敵対

秀吉亡き後、前田利家が亡くなるや

バランスが崩れ、家康は大きな力を有し、豊臣恩顧の福島正則、加藤清正ら反三成勢力を味方につけ時を伺います。五大老筆頭、秀頼後見職ともいえる立場の家康が、上杉に対し「秀頼殿にご挨拶に、大阪へ下向せよ」と、通達するも上杉腰を上げません。

待つてましたと上杉叛逆と決めつけ、「上杉討伐じゃ」と出陣。出陣すれば、三成と景勝が連携して家康をはさみ討ちにしよう、旗を立てるに違いないとの家康の読み通り、三成挙兵。

合流するべく上田から出陣した昌幸は、沼田から出陣した信幸を、下野犬伏の米山観音堂に呼び寄せ、

「三成を挙兵させるべく出陣、老獪な家康のやり方よ」

「兄上、父上の下へ参加を誘う石田の使者が参りました」

「さぞ有利な条件を提示したことでしようが、よもや父上は見え透いた餌につられ、徳川様を裏切ろうなどとお考えではございますまいな」

「裏切る？ わしがいつ家康の家来になつたのじゃ、幸村とともに信濃へ引き返す。徳川の下で働いたとてどれほどの恩賞がある。これまでも煮え湯を飲まされておる」

「諸大名の大半が徳川勢、勝ち目はございません」

「わしは石田方につく、万一敗れたとて真田家にはそなたがおる」

「敵味方に分かれても戦えど…」

「いずれが負けても、真田の家名と血が残る」

「兄上、徳川様は優れた為政者かもしれませぬが、これまでの行為は許すことが出来ません、豊臣家には恩があります」

沼田城を取引の材料にした家康と違って、真田の領地を安堵し独立した大名と認めてくれた豊臣に恩義があり、昌幸は武田時代から家康に不信を抱いていたこともありました。

昌幸は、上田城へ引上げる途中、息

子と敵味方に別れ、「孫の顔を見るのもこれ限りになるやもしれ」と。孫は可愛いものです。信幸の居城沼田城へ。夫婦仲睦まじく信幸、小松姫の間に二男二女をもうけていた。ところが城門がぴたりと閉まっている。

「昌幸じゃ、孫の顔を見にきたのじゃ、門を開けよ」

と、大手門の櫓の上に凜々しく鉢巻をしめ、緋緘ひおどの鎧を着し薙刀をたずさえた小松姫、

「父上の名をかたる不埒者ふらち、父上は夫の敵、その敵がこられるはずがない。定めし父上の名をかたる不埒者であるう、門を開けることはなりません」

「わしをかたり者と申すか、力づくでこの門を破るぞ」

「我は、女なれど沼田城主真田信幸の妻、徳川四天王の一人本多平八郎忠勝の娘、お相手つかまつります」

「ウーム、嫁といえど天晴な女子おなごじゃ」  
流石の昌幸も感嘆。親子が敵味方に分かれたことを、家臣に認識させるためでありました。その後小松姫は着物を着替え、ひそかに城近くの正覚寺に昌幸・幸村親子を案内し

「お父上様、さぞお疲れでございます。しよう、心ばかりの酒肴を用意致しました。ごゆるりとお過ごし下さいませ。子どもたちを連れて参りました、どうぞ孫の顔をご覧下さりませ」

「そうか、かたじけない。よう来たな、皆来い爺じゃ、大きゅうなつて沼田の城を守るのじゃぞ」

思わずはらりとひとしずく。  
ドラマの視聴率ドーンと稼ぐことでしょう。いい場面です。

「流石は本多の娘よ、これで真田の血は安泰ぞ、サ幸村参ろう」

上田への道を急いだのでございます。

三成挙兵の報せに小山会議おやま。三成憎しから福島正則一番に、家康に味方を宣言。豊臣恩顧の諸将も賛同。

掛川城主山内一豊が、「我が城を差し上げます、ご随意にお使い下され」

これはM&A、かつては大が小のみ込んだものですが、子会社の方が経営内容がいい会社少なくありません。

ここは「私の会社を差し上げます、その代り我が社を存続させてください」というもの。家康これによって勝利を

確信したといえます。だからこそ一豊に土佐国二十四万石を与えています。

「信幸、沼田城に戻り父昌幸の動きに備えよ」家康は、徳川に忠誠を誓った信幸を大いに評価し、

「上田はわずか三万八千石にしかすぎぬが、越後の上杉と大阪の石田をつなぐ中間にあり、西へ向かう我軍の背後を突かれては厄介、昌幸の手の内を知り地の利に通じた、そなたを頼りにしておるぞよ」

「ハハッ」

東海道を進んだ東軍の先鋒は、正則の居城尾張の清洲城へ。三成は大垣城へ。家康は動かさず江戸に於いて合戦前から、五十日間に百五十五通の手紙を八十二大名に「味方して下さい」と、せつせと手紙を書いています。三通送った大名も。冷たいといわれる官僚タipesの三成と大きな違いです。

今ならメールの方が手軽。イエイエ心が通うのは手紙です。お忘れなく。

次回、再び徳川を追い払う上田の戦。乞うご期待を、ポポンポン